

西の中世史を比較して研究することに、凡そ制度なるものはその成立の基礎に社会経済の制約をもつと同時に、その精神の本質を宗教によつて規定せられる所が多いことを見出すのである(東京創文社・七〇八頁)。

— 牧健二 —

George Rude; Les ouvriers parisiens dans la Révolution française (Pensec, No. 48-49, 1953, Mairoul.)

最近のフランス革命史研究の顯著な一つの傾向は、革命における民衆の役割、その意義、その性格などについての考察の進展であらう。ジョーレス、イチエーゾ、ルフェーザルなどによつて深められてきた社会経済史的研究は、今次大戦後の社会主義勢力の伸張を背景とし、労働運動史的立場よりの研究の推進——たとえば Brulat; Histoire du mouvement ouvrier français, T. 1, 1952; デュロゲマンの著作 Daniel Guérin; La lutte de classes sous la première république, 2 vols, 1946; それに對する批判をよつてフランス革命に對

書 評

ける階級闘争、階級構成、階級内の諸対立などの問題に、研究の焦点がしぼられてきた。極めて概論的で簡単なものであるが、ソブールの最近の論文 Albert Soboul; Classes and Class Struggles during the French Revolution (Science and Society Vol. X Ⅲ, No. 3, 1953) もその意味で注目される。革命史研究におけるこの傾向の問題点の一つは、モンタニエール、シヤロン、サン・キュロット、もしくは民衆、プロレタリアなどと呼ばれるものの具体的な実体、それとブルジョワジーとの關係、それらが革命においてどう意義の解明にあつたといふよう。ここに紹介するリュードの論文も、この問題解決への一つのアプローチである。このイギリス人の革命史家については詳しくは知らないが、民衆運動についての関心が強く、最近の専門誌にも、革命初期のバリの暴動の社会的構成や、九三年二月末のバリの暴動に関する論文を発表している(“La composition sociale des insurrections parisiennes de 1789 à 1791.” “Les émeutes des 25, 26 février 1793 à Paris.” Annales historiques de la Révolution française, XXIV,

1952, XXV, 1953, “The motives of popular insurrection in Paris during the French Revolution.” Bulletin of the Institute of Historical Research, Vol XXVI, No. 73.)

40) の「フランス革命におけるバリの労働者」という、豊かな根本史料に基づく実証的な論文は、革命前夜において賃労働者はどのような点で一つの社会階級を形づくっていたか。バリにおける革命運動の過程で、どんな社会的政治的役割を演ずることができたか、の二つの課題を解決することにある。短かい序言と結論を除いて、論文は、(一)革命前夜における労働人口と(二)労働問題——これが第一の課題への解答である——を取扱つた部分と、革命におけるバリの労働者の役割を對象とした部分、すなわち、(三)八九年七月十四日から九二年八月十日まで、(四)八月十日から九五年五月(革命暦三年フレリアル)まで、からなる。以下各節を簡単に紹介しよう。(序言)従来の革命は研究では、(一)労働者を社会集団(ソシエテ)として、都市や町村の小生産者、貧民の辨と区別しない立場、(ルヴァス

ール、マチエーズ)と、(三)明確な社会階級として、十八世紀末の「労働問題の重要性」や革命における労働者の役割を誇大視する立場(ピカール、ジャフネ、ゲラン)があることを指摘し、前者のような混同と後者のもつ不正確さを克服することを目的とすることに問題提起を求めている。

(一) 十八世紀末の労働人口。十八世紀の中頃以来フランスでも資本主義的工業が発展し、賃銀労働者が多く生れたことは明らかである。とくにリヨン、ルーアン、リール、エールプーフ、セダンなどの織維工業都市で著しい。手工業業が有勢なバリでも、九一年には百乃至七百人の労働者をもつレース・紗工場が百五十ほどあつた。しかしこれらの都市を除いては、都市では大体手工業が支配的であり、農村工業においても、生産者は賃労働者よりもむしろ農民であつた。このような工業状態からして、当時の労働人口の構成は決して同質的なものではなく、農民・労働者、手工業労働者、(工場)賃銀労働者など異質的な要素をふくみ、一つの明確な社会階級としての生活様式をもつていたのは、バリ

では建築労働者たち位であつた。これらの異質的な労働人口の数については、正確に分らないが、バリに關する限りでは、一七九一年の調査によると、賃銀労働者とその家族とは、バリ人口の半を占めていた。しかし、バリは例外であつて、他の都市の場合は、はるかに少数であつたと思われる。

(二) 革命前夜の「労働問題」、十八世紀の後半、とくに七六年以後は、労働問題——ストライキもしばしば起つている。しかし、この労働者対親方の闘争形態は、賃銀の値上とか労働条件の改善とかよりも、パンやその他の生活必需品のための闘争という形をとることが多かつたことに注目する必要がある。これは先述のフランスの工業・労働状態に基づくものであり、その点で賃銀労働者和其他の階民 *menu peuple* とが結びつく。 *menu peuple* というのは、小店主、小工場主、独立的職人、賃銀労働者などの、無産者や小資産者を總称する言葉であるが、これらが、富裕な商人や、貴族・ブルジョワの買占人たちに對して、パンのために同盟して闘争する。サンキュロットという集合名詞は、この民衆の同

盟に對して与えられた言葉なのである。労働者の階級意識、社会思想も革命前夜には明確でないし、小親方、或は、ブルジョワジーのそれとも、判別しえない。その意味で革命前夜の「労働問題」の重要性を誇大視してはならない。

(三) 八九年七月十四日から九二年八月十日まで。下層民を革命運動に参加させたものは、何よりもまずパンを初めとする物価高であつた。八九年七月の運動を起したのも、パンの欠乏と高価とである。しかし同時に、政治的には彼らは、封建的貴族政が敵であることを充分理解していた。その点でブルジョワジーと結びついており、彼らの呼びかけに應じて行動した。七月のバリでの革命運動に最も寄与したものは、労働者を含めての *menu peuple* である。

下層民の経済的要求をもつとよく示すものは、十月の事件である。八月末から九月にかけて、パンを求める民衆——とくに婦人たち——の暴動が相次いで起つている。十月の事件の結末は、この民衆の運動をブルジョワジーが利用したものと見える。しかし、この場

合、民衆の運動も単にパンの要求だけのものではなく、宮廷や封建貴族に対してブルジョワ革命を防衛する政治的目的をももつていたことは明らかである。

九一年の春から、民衆のパンと職を求める運動が盛んになつてきている。支配権を握つたブルジョワジーはこれを恐れて、九一年六月には、労働者の団結を禁止した有名なシャプリエ法を出した。しかしブルジョワジーの左翼(デモクラット)は結社を形成し、下層民の要求を支持した。それはシャン・ド・マールの事件となつてあらわれた。

九二年初にも、砂糖の欠乏を中心に暴動が起つたが、同時に戦争の開始とともに、労働者の革命的愛國的情熱も高揚した。反革命分子が下層民の窮乏につけてこんで策動したが、成功をみなかつた。このような労働者とサンキュロット——リュードによると九二年の六月以後 *man peuple* がこう呼ばれるようになった——たちの革命的情熱が、八月十日の事件に結実する。八月十日事件の負傷者八二人の中、三〇人ほどが労働者であつた。八月十日の事件において、パリの下層民は、はつ

きりした社会的プログラム——パンや必需品の物価統制——を提出している。

(四) 九二年八月十日から九五年五月まで、八月十日の事件によつて労働者の大部分は参政権をえた。しかし、同時にジロンドン・ブルジョワジーの経済政策に対して、とくに物価高に対して闘わねばならなかつた。九三年二月末からそのための対抗が起つている。この運動に明確な政治的目標を与えたのがジャコバンである。五月三十一日の事件——ジロンドンの追放——を行つたものは、このようになサンキュロットであつた。しかし、その中で労働者がどれほどの寄与をしたかは正確に云うことは困難である。

ジャコバンが政権を握りえたのは、労働者を含むパリのサンキュロットとの同盟によつてである。しかし、祖国防衛、戦争遂行のために、ジャコバンはこれらの勢力と同時に、都市や農村の大ブルジョワジーの一部の支持をも必要とした。その故に物価の統制が同時に賃銀の統制を含まねばならなかつた。労働力の不足の時期におけるかかる政策が、労働者、従つてパリのサンキュロットの大部分を

ジャコバンから離れさせた。この労働者対ジャコバンの闘争は九四年初頭から七月まで漸次尖鋭化して行つた。軍需産業関係労働者の賃上げ要求は、公安委員会にとつての最大の不安となり、それだけに弾圧も強かつた。テルミドールの事件の背景には、この労働者対ジャコバン闘争がある。テルミドール・ブルジョワジーは、革命中にブルジョワジーが常にやつたように、自己の目的のために、ここでも下層民の運動を利用したのである。

テルミドール以後は大ブルジョワジーの勝利、サンキュロットの敗北の歴史である。インフレーションの進行によつて、サンキュロットの暴動叛乱は九四年末から九五年初に、しばしば起つた。しかし組織とプランを欠いたために失敗し、九五年五月の叛乱を最後に、パリのサンキュロットの敗北は決定的となつた。

結論。革命前夜に労働者の数はかなり多かつたことは事実としても、彼らはまだ明確な階級意識をもつておらず、その社会思想においては、支配的であつた手工業者を中心とする他の下層民のそれと区別できず、古い同業

組合的な「保護」を要求していた。革命において最も尖鋭だったのは、突に手工業者だった。サンキユロットの運動が実質的には、反資本主義的であるのに、これを新しい社会組織を目的とするプロレタリア攻勢とみた点に、ゲランの誤謬がある。

さらに革命の社会闘争において、賃銀に關する要求は第二義的であり、革命史として重要なのは、パンと物価統制の要求であつた。また政治的にみても、労働者は行政機関の中では大した役割を果していない。最もデモクラティックな共和政の時期でさえも、精密に労働者的な政治思想の兆はみられない。要するに、フランス革命における労働者階級の役割は、サンキユロット的集団の中でさえ、第二義的なものに他ならない。

紙幅の制限のために詳細な註を省略したために、充分に意をつくしえなかつたが、リュードの云わんとする所は、ゲランのように、革命における下層民の力を過大に評価する見解に反対して、それが重要な役割を演じたにせよ、革命史全体からみれば、第二義的に止まるものであること、いろいろな歴史的制限

をもつてゐることを明らかにし、フランス革命における民衆運動に正しい位置づけを与えようとする点にある。——前川貞次郎——

李朝実録 第一冊

李朝実録、太祖実録から哲宗実録まで二五朝、二九種、一八九三卷、八八八冊の全実録は、昭和五十七年に京城大学法文学が写真版複製を印行したのであるが、印刷部数は三〇部にとどまつた。今国学習院東洋文化研究所において、半永久的継続事業として李朝実録普及版の印行を計画し、本年度分として、太祖実録より太宗実録までを五冊として発行し別に索引一冊を添えるということであつて、太祖実録一五巻が、已に第一冊として刊行された。李朝実録は朝鮮史研究の基本的文献であることはいうまでもないが、明・清の中国・満洲との関係、室町時代以降の日本・琉球との関係等の重要資料である。日本についていえば、ただに日鮮交渉の根本史料であるだけでなく、日本の政治・経済・文化・外国関係等についても、国内史料とは別種の貴重な史料を多く提供してくれる。例えば、京城

大学の複印によつて、室町時代の西日本の政治情勢、国内の経済の發達、ことに琉球並に南方諸地域との関係が、いかに明かにし得られたかは、われわれの記憶に新なるところである。李朝実録普及版の完成は、真に学界永遠の事業といふべきであるが、全部で約二百冊一五万頁にも達する龐大なものであり、切にその成功を期待する次第である。なお印刷部数は五百部に限定し、第一冊の購読者を登録し、その人々に限り第二冊以下の購読を受付けることになつてゐる（李朝実録第一冊、A5版、総クロス装、頒価一五〇〇円、申込先 東京都豊島区目白町一丁目 学習院東洋文化研究所）。

——小葉田 淳——